校長の生徒・先生応援日記 Vol.6

学びの匂い

ルールを守ることの大切さ

私達は、生まれた瞬間から人の手を借りなければ生きることができません。たとえ、自分の力で歩くことができるようになったとしても、周囲との関わり合いをとおして、「人」としての生き方を身に付けていきます。それは、ルール、マナー、秩序、規範など、様々な言葉で呼ばれているように、私達は、常に社会の中で生きていることを意識し、ルールの中にこそ存在する自由を大切にしていかなければならないと思います。

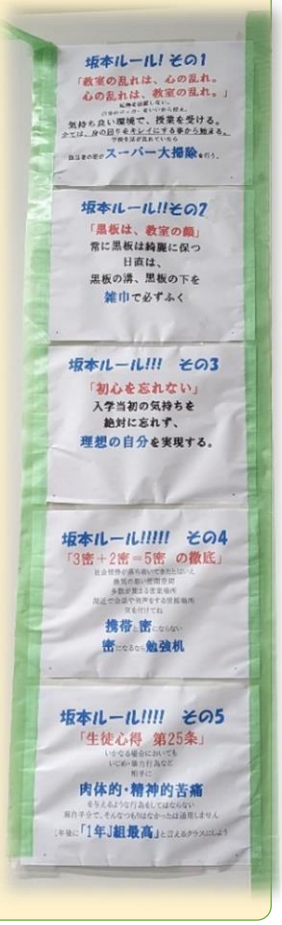
思い起こすと、私が過ごした昭和４０年代は、大人が偉い、怖い時代でした。地震、雷、火事、親父といって、特に父親は威厳がありました。また、ルールやマナーを親からだけではなく、周囲の大人から怒られて覚えるのが当たり前の時代でした。私が住む団地には、小学校３年生までお風呂がありませんでした。そのおかげでしょうか、毎日の銭湯で、からだの洗い方や拭き方、湯船の入り方、出た後のコーヒー牛乳の飲み方まで近所のおじさんに教わりました。お祭りや地域清掃では、ほうきの使い方から焼き芋の焼き方まで、いつもはうるさい近所の友達のお父さんから教わり、大人と会話することが怖いけど少し背伸びができて、大人に近づけた気がしました。何もない時代でしたが、風呂、電話、テレビ、家の中に便利なものが徐々に増えていきました。でも、残念なことに全ては父親のものでした。

そのため、父親がいない時は、これらを自分の物の様に使えるので喜んでいました。一番風呂は父親ですから、仕事から帰ってくるまで入れません。電話は、親子電話で、近所数件で一台の電話を使います。連絡網は、担任の次が５人くらいの代表者だけだったのを思い出します。テレビは、父親の見たい番組が最優先です。ドリフターズや仮面ライダーも見たかったけど、中々観るチャンスがありませんでした。子供ながらに何とかして見たいと考え、母親と相談して、自分の見たい番組の時間帯に父親が風呂に入るように仕組んだりもしました。トイレに父親が立ち上がると、妹と争ってチャンネルを奪い合いました。一度だけ、テレビのチャンネルが取れてしまい、父親から兄妹でゲンコツをもらったこともありました。

このように、家族の中で、我慢や順番を学ぶことができる時代だったことを思い出します。時代が流れ、今では何でも手に入る、何でも知ることができる時代となりましたが、昔の生活とどちらが幸せなんだろうと思う時があります。

「知らない」ことが当たり前で、大人から教わることで、モノを大切にしたり、大人に近づけた喜びを感じたりできたことは、何でもできる、知っている大人が尊敬されていた時代であったと実感しております。

さて、先日、私は、１年生のあるクラスの授業を見学しました。ふと、壁を見ると、担任の先生の名前を名称とするクラスルールが５つ掲げてありました。その一つ一つに目を通すと、生徒一人一人の心の温かさをもって守っていこうとするクラスの結束力を感じずにはいられませんでした。



コロナ禍での生活は、依然として終わってはいませんが、コロナ禍により私達は、相手を気遣うマナーをあらためて意識することとなりました。

マスクの着用は、５月８日から自己の判断に委ねられましたが、高齢者や基礎疾患のある方の前では、不安な気持ちにさせないためにもマスクの常備は欠かさないことがマナーです。これは、小さな行動ではありますが、私達一人一人が社会を形成する役割があること忘れず過ごす大切なルールではないでしょうか。私達は、大人になっても時として、自己を優先することばかりに目を向け、他人への配慮を忘れてしまうことがあります。当たり前の事をクラス全員で守っていこうと生徒と一緒に安心した社会（クラス）を作ろうと努力する担任の先生の思いは、きっと学びの匂いとなって生徒の皆さんの日常生活に浸透していると信じてやみません。

令和５年７月